

第4章 まとめ

近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年

調査結果は前述のとおりであり、わずかに物原の一部であったものの、初めて近世丹波焼の窯址に発掘調査が実施されたのである。

このため、登窯の構造規模等は明らかでないが、遺物は大半が重ね焼をする播鉢と焼台で大甕がないことを考えると、窯の高さはさほどなかったと想定してよい。

次に大量の播鉢を包含していた物原は、比較的良好な状態で残存しており、遺物の垂直分布でみたように播鉢A・B・C・D・E・F類、G1・G2類がほぼ層位的に堆積し、新旧関係の把握が可能であった訳である。

その他、播鉢以外の製品も各層に若干存在するが、他の丹波焼窯出土のものに比較すると技術的に稚拙といえる。

最後に、この下相野窯出土の播鉢を中心に消費地の資料を参考として、近世丹波焼播鉢の編年を考えてみよう。(第3表 近世丹波焼播鉢編年表参照)

< I 型式 >

体部が直線的に開いて立ち上がり、口縁部はそのまま切り離した形を呈する。口縁端部と体部が直角をなす。体部内面の播目は4～6本のクシ描が基本であり、底部内面(見込み)の播目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。生産地には、今田町窯屋北窯址^①と篠山町山内窯址^②や西脇鹿野窯址^③等にこの時期のものがみられる。消費地でいえば、兵庫県篠山城、姫路城武家屋敷遺跡^④や明石城武家屋敷遺跡^⑤等で出土があり、明石城では土壇内一括資料として肥前系陶磁器と共伴している。これらの資料から、年代は17世紀初頭と考える。

なお、中世からの流れのなかで捉えられるこれと同形態の播鉢で、口縁部内面に凹線を持ち体部内面の播目がへら描の一本単位のもので、この時期では共存したと考えられる。

< II 型式 >

下相野窯址のA類にあたる。I型式と大差ないが、口縁端部が若干厚くなっている。この段階までが、無釉の焼き締めであろう。体部内面の播目は、4～6本のクシ描が基本である。底部内面(見込み)の播目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には京都府宮津城^⑥、東京都東京大学御殿下記念館地点、大阪府能勢町内の遺跡^⑧や東除川(亀井遺跡)^⑨等がある。年代は、共伴資料から17世紀前葉と推定する。

<III型式>

下相野窯址のB類にあたる。口縁端部と体部が少し鈍角をなし、II型式の口縁端部が若干上方に広がる。この段階前後で泥土（赤土部釉？）が塗布されるようである。体部内面の播目は、4～6本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に＋あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県伊丹郷町遺跡^⑩と大阪府堺環濠都市遺跡等がある。両者とも土壌内の出土で肥前系陶磁器と共伴しており、この資料から年代はII型式に続く17世紀前葉と推定している。

<IV型式>

下相野窯址のC類にあたる。口縁端部を上下に拡張させ、その断面形が正三角形を呈する。体部内面の播目は、6～8本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に＋あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県姫路城武家屋敷遺跡と京都府宮津城、大阪府堺環濠都市遺跡、東京都東京大学御殿下記念館地点等がある。これらの資料から、年代は17世紀中葉と推定できよう。

また、小振りの播鉢である下相野窯址G1類がこの時期前後に伴うものと考えている。

なお、文献をみると承応3年（1654）には登窯の経営を請負う窯座制も始まっている。

<V型式>

下相野窯址のD類にあたる。口縁端部を上方に拡張させ、その断面形が二等辺三角形を呈する。体部内面の播目は、6～8本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に＋あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。生産地には今田町窯屋北窯址にこの時期のものが見られる。消費地では兵庫県伊丹郷町遺跡と大阪府堺環濠都市遺跡や東除川（亀井遺跡）、東京都白鷗遺跡等がある。これらの資料から、年代は17世紀後葉と推定したい。

なお、播鉢が大量に生産された時代の文献からの傍証として、元禄9年（1696）には大坂の問屋に、丹波播鉢問屋^⑪がみられるのである。

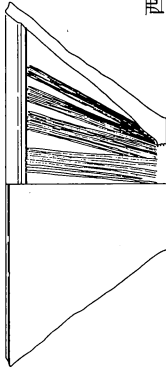
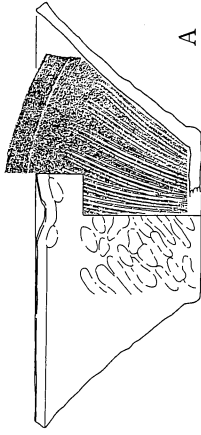
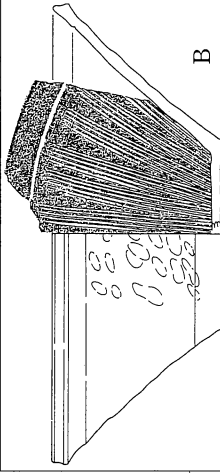
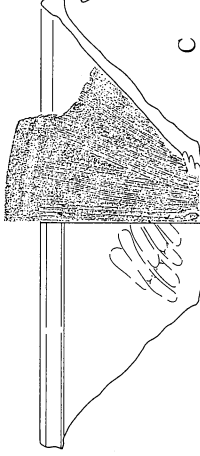
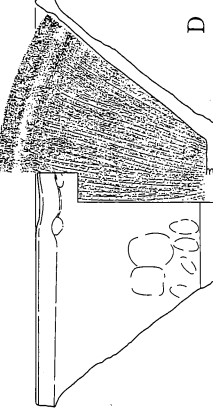
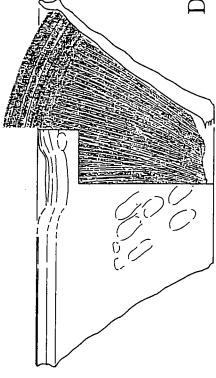
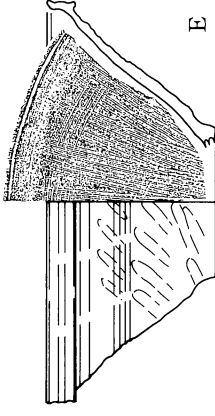
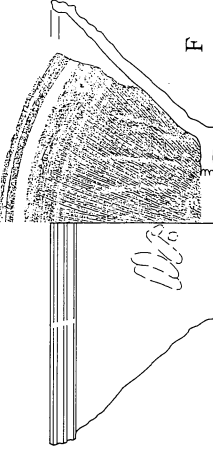
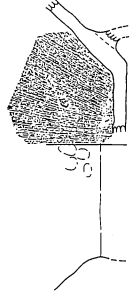
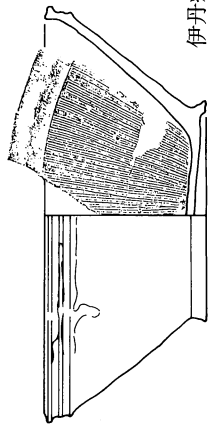
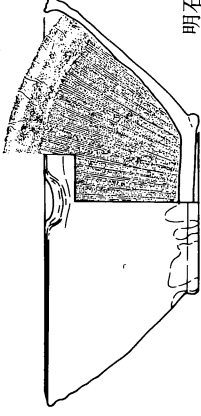
<VI型式>

下相野窯址D類の拡張した口縁端部を外方にナデ、内面に鈍い稜をもたせる。体部内面の播目は、6～8本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に＋あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県伊丹郷町遺跡と大阪府東除川（亀井遺跡）等がある。これらの資料から考えて、年代はV型式に続く17世紀後葉と推定している。

<VII型式>

下相野窯址のE類にあたる。直線的に外傾した体部を先端で水平に伸ばし後、口縁部を直立させ、幅広い縁帯を受け口状に付ける。体部内面の播目は、9～12本のクシ描が基本である。

第3表 近世丹波焼播鉢編年表

| 型式 | 年代 | 播鉢 | 鉢 | 1990 松澤 | 1988 長谷川 | 1985 広瀬 |
|------|-----------|---|-------|----------------|------------------|--------------|
| I | 17初 |  | 西脇鹿野窯 | | | |
| II | 17前 |  | A | II類 16末～17初 | IIA2 16末～17中 | IIIA 17第1 |
| III | |  | B | | | |
| IV | 17中 |  | C | III類 17初～前 | IIb1a 17中～18前 | IIIB 17第2 |
| V | 17後 |  | D | | IIb1b 18前～中 | IIIC 17第3 |
| VI | |  | D | | IIb2a 18中～後 | IIID 17第4 |
| VII | 18前 |  | E | | | IVA 18前 |
| VIII | 18中 |  | F | IV類 17前中以後 | IIb2b 18末～19前 | VIB 18前～中 |
| IX | |  | H | | | |
| X | 18後 |  | 伊丹郷町 | | | |
| XI | 19 前～中 |  | 明石城 | | | |

底部内面（見込み）の播目に＋あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県姫路城武家屋敷遺跡と伊丹郷町遺跡、大阪府東除川（亀井遺跡）等がある。三田市高川1号古墳では、古墳の再利用時の遺物として出土している。これらの資料から考えて、年代は18世紀前葉と推測しており、ここにひとつの製作上の画期をみる。

なお、文献では正徳年間にも大坂の間屋に、丹波播鉢問屋^⑬がみられるのである。

<Ⅷ型式>

下相野窯址のF類にあたる。E類と同様の口縁形態が若干長くなり、外面の凸凹が強く凹線文風になる。体部内面の播目は、9～12本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に－あるいは＋をつけた後、外周に円を描くものが多いことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県姫路城武家屋敷遺跡と伊丹郷町遺跡、大阪府東除川（亀井遺跡）や堺環濠都市遺跡等がある。これらの資料から、年代は18世紀中葉と推測している。

また、小振りの播鉢である下相野窯址G2類がこの時期前後に伴うものと考えている。

<Ⅸ型式>

下相野窯址のH類にあたる。F類と同様の口縁部で、体部下に貼り付け高台を持つ。体部内面の播目は、9～12本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に－あるいは＋をつけた後、外周に円を描くものが多いことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県丹南町初田館跡^⑭がある。この資料から、年代はⅧ型式に続く18世紀中葉と推測している。

<Ⅹ型式>

底部には高台を持ち、直線的に外傾した体部に直立気味の口縁部が付く。口縁端部は平坦面を作り、外面は凹線文を施す。体部内面の播目は、11～12本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目に－をつけた後、外周に円を描くものが多い。体部内面には、新たに鉄釉の使用が始まり、前型式まで体部外面にあったユビオサエ痕は回転ナデにより、みられなくなる。また、重ね焼する時の窯道具も陶片ではなくなっている。消費地である兵庫県伊丹郷町遺跡^⑮の資料から、年代は18世紀後葉と推測しており、ここにもひとつの製作上の画期があると考えられる。

<Ⅸ型式>

底部には高台を持ち、直線的に外傾した体部に内弯気味の口縁部が付く。口縁端部はT字状に広がり、上面は浅い凹線文を施す。体部内面の播目は、11～12本のクシ描が基本である。底部内面（見込み）の播目は同心円または渦巻き状になり、体部内外面とも鉄釉が施される。消費地である兵庫県明石城武家屋敷遺跡^⑯の資料から、年代は19世紀前葉～中葉と推測している。

丹波焼播鉢は、17世紀前葉をもって突如畿内はもとより江戸の町まで広汎に流通していく。この背景には、生産地における連房式登窯の導入と、消費地での自由な商品流通があげられよ

う。そして、備前焼等との競合の後、18世紀中葉には凋落が始まっているのである。

こうした中、下相野窯は丹波播鉢全盛期の17世紀前葉から18世紀中葉かけて操業したものと考えられる。なお、各型式の年代は物原の出土状況にもみられるように、盛期を示すものであって、当然その前後に及ぶものとする。

註① 松澤 修 「信楽と丹波」『紀要』第3号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1990

② 大槻 伸 「丹波とその周辺」『日本やきもの集成』7 平凡社 1981

③ 岸本一郎 「周辺の窯業遺跡」『播磨・緑風台窯址』西脇市文化財調査報告1 1983

④ 秋枝 芳・山本博利 「特別史跡姫路城城跡（白鷺中学）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度 1987

⑤ 明石市教育委員会調査 1989年 稲原昭嘉氏の御教示による。

⑥ 荻野繁春 「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 1990

⑦ 鈴木裕子 「東京大学御殿下記念館地点出土の陶磁器」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会 第三回大会・発表要旨 江戸遺跡研究会 1990

⑧ 広瀬和雄 「丹波播鉢をめぐる二、三の問題」『能勢町における埋蔵文化財の調査』I 能勢埋蔵文化財研究会 1985

⑨ 広瀬和雄 「陶器」『亀井』その2 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会 1986

⑩ 白神典之・増田彦彦 「堺における近世の陶磁器と土器について」『関西近世考古学研究』 関西近世考古学研究会 1991

⑪ 註②大槻論文

⑫ 「摂州難波丸」上巻畢『日本國花萬葉記』卷第六之二

⑬ 「正徳年間ノ大坂問屋」『波速叢書』第九

⑭ 兵庫県教育委員会調査資料 岡崎正雄氏の御教示による。

⑮ 兵庫県教育委員会調査資料 村上泰樹氏の御教示による。

⑯ 兵庫県教育委員会調査資料 山下史朗氏の御教示による。

参考文献

1. 藪内 清 1955 『丹波立杭窯の研究』
2. 杉本捷雄 1969 『改定丹波の古窯』兵庫県陶芸館
3. 檜崎彰一 1977 『丹波』日本陶磁全集11
4. 長谷川真 1988 「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会